「震災をわすれないとりくみ」を学校文化に

芦屋市立打出浜小学校
教諭　永田　守

１　取組の内容・方法

学校は地域の防災拠点。3.11 東日本大震災をはじめ、昨年の熊本地震など多くの災害のことを決して忘れてはならない。私たちは災害後の世界をともに生きるものとしてどのようなことができるのか。そして、未来を生きる子どもたちに命を守る「防災教育」を学校文化としてどのように定着し深めていくのか。「震災をわすれないとりくみ」から、子どもたちや私たち教職員があらためて自他の命の尊さを感じたり、当たり前と感じている日々をどのように生きるかということをつかみとることができると考えている。

本校でも、震災で大きな被害を受けた。校舎は亀裂を生じ、運動場も大きなひびが入った。埋立地に建てられた地面は液状化現象が生じた。被災当時、1500 名が学校に避難。当時の教職員は懸命に避難所運営や学校再開に向けて奔走した。その中で、一番の悲しみは、５年生の児童の尊い命が奪われたということだ。その後、打出浜小学校では、「震災をわすれないとりくみ」として、1.17 追悼集会をはじめ、防災教育に取り組んでいる。

震災から 20 年もの時間が経過し、教職員自身も震災を経験していない世代が増えてきている。「なぜ、震災をわすれないとりくみが必要なのか？」「震災をどのように子どもたちに教えたらいいのか？」若い教職員を中心に戸惑ったり悩んでいる実態がある。また、「3.11 の未曾有の大災害を私たちはどうとらえて、子どもたちと学びをつくっていけるのか？」大きな課題がつきつけられたように感じた。そこで、今一度、「震災をわすれないとりくみ」の必要性や考え方を教職員のなかまで共有し、高め合う必要を感じた。

今回、「震災をわすれない」とりくみについて、打出浜小学校のなかまと試行錯誤し考え、実践した内容について報告したい。そして、今後の実践にいかしていきたいと考える。

２　取組の成果

①　精道小・打出浜小「合同防災教育教職員研修会」

震災 20 年の節目を迎える 2015 年。精道小学校との合同防災教育研修会を企画した。

精道小は 1.17 の追悼式を毎年執り行っている。毎年、亡くなった子どもたちの遺族や友人が式に参列する。震災で亡くなった尊い命を悼み、誓いの言葉や追悼の言葉を全校生で聞くなど、亡くなった尊い命や震災のことを忘れないとりくみを続けている。また、「震災を語り継ぐ会」を行い、子どもたちが震災のことを調べたり、当時を知る人にインタビューするなど震災のことや人々の支え合い、今後の防災の在り方について学び、全校生に伝える教育実践が行われている。

今回、精道小の先生方と合同で研修する中で、私が以前感じたような「震災と向き合う」エネルギーや熱というものをみんなで感じることができれば…と思ったのがこの合同研修会を企画した理由だった。それと同時に、打出浜小学校でも大事にしてきた「震災をわすれない」様々なとりくみを共有し、意味づける機会にしたいと考えた。

研修会のテーマとして「“震災をわすれないとりくみ”震災 20 年を迎えるにあたって…＝1.17 と 3.11 を結ぶ＝」とした。講師として東京学芸大学の大森直樹さんを招へいした。両校の「震災をわすれない」とりくみの交流をした後、グループ討議を行った。若い先生たちが「震災をどのように教えたらいいのか？」「どう震災と向き合うべきなのか？」悩んでいる現状を踏まえ、様々な年齢層の先生が同じグループになるように配慮した。このグ

ループ討議では、学習の成果や課題、苦労や悩み、子どもたちの成長、それぞれの震災体験など…活発な意見交流の場面がみられた。

（研修会を終えて：参加した教職員の感想）

・「震災をわすれないとりくみ」を通して、子どもたちと命のことについて学んでいきたい。
・同じ職場で働いている先生の貴重な震災体験を聞くことができて、学ぶことが多かった。
・大森先生の「当事者から話を聞くことでもうすでに当事者になっている。先生たちが見聞きしたことを自信をもって子どもに伝えてください」という言葉が心強かった。震災についてもっと勉強したいと思いました。

今回、はじめて合同で研修会を企画した。学校の状況は違えども、20 年前に起こった震災のことを学ぶために今もなお教育課程に組み込み地道に実践を続けていることに力が湧いた。震災を体験した先生が語る言葉に若い先生が熱心に耳を傾ける姿が印象的だった。また、東北の被災地や教育現場の実態についての研究者である講師の大森先生から「芦屋で続けられている「震災をわすれないとりくみ」は東北の多くの命を救う教育実践である」という言葉をいただいた。この言葉は、わたしたちに大きな勇気を与えてくれたとともに、3.11 後の教育実践ともつながる可能性を示唆してくれた。

② 「南海トラフ地震への備えと水平移動避難」

近い将来発生が予想される「南海トラフ地震」。この 30 年の間に 70%の確率で発生が予想されている。太平洋上で起こるプレート型地震なので津波被害も想定される。打出浜小学校は海に隣接した場所に立っているが、これまで津波被害の想定ができていなかった。3.11 以後、職員の中から津波被害についても想定した対策をするべきとの声があがった。まず、取り組んだのが 3 階への避難訓練。海抜 4 m に立つ校舎。津波が襲来したとき、3 階まで避難すると安全だろうと考えた。しかし、もし地震で校舎が火災発生などがあり、3 階まで避難できなければどうするのか？そこで、今回、津波被害を想定した水平移動訓練にチャレンジしてみようと考えた。職員の中からは「43 号線（国道）が校区を横切っているので、水平移動は現実的じゃないなのでは」「児童 600 名をつれて山のほうに逃げるのはむずかしいんじゃないか」というような意見も多く出された。私たちは、3.11 の東日本大震災の教訓から学ばなければならない。「より高く、より遠く」、「想定外を想定する」、「子どもの命を守るため教職員の防災意識を高める」…。「子どもの命を預かる立場として、避難の選択肢を一つでも増やすつもりでやってみましょう」と提案し納得してもらった。

8 月、まずは教職員自身が目的地である岩園小（海抜 38m）まで歩いてみようと研修会を企画した。3 つのグループに分かれ、「どれくらい時間がかかるか」「避難する際の危険個所はないか」「避難ビルはどこにあるか」「雨天の場合はどうか」などポイントを定めて歩いた。その後、グループで交流会を持ち、情報の共有を図った。暑い中だったが、大変有意義だった。

それは、「①南海トラフ地震が起こった際、打出浜小学校も津波被害が起こりうる」「②打出浜小学校において水平移動も避難方法の選択肢の一つになり得る」「③水平移動の目的は、“海から遠ざかる”“高所（10 m以上）の場所に移動する⇒国道 2 号線をこえる」ということが共通理解できたことだ。特に、「水平移動」も避難方法の選択肢の一つとして教職員が共通理解で

神戸新聞（夕刊）
2016年(平成28年)8月25日 木曜日

南海トラフ地震での津波想定

標識確認し避難所へ

芦屋・打出浜小 教師ら防災研修

南海トラフ巨大地震に備え、芦屋市打出浜小学校で（新浜町）が全国発、大津波警報を想定した防災研修を行った。教職員ら約60人が参加。同校は北に約400メートル離れた岩園小学校に向かって歩き、役割分担や情報共有を確認した。

昨年度、市が大津波警報が出た際の避難方法を決めたことから実施。打出浜小に隣接する津波の高さは最大3・7メートル、到達まで約110分と想定されている。

にあり、北側には津波で浸水し、なかに子どもの浸水想定区域が広がっている。約1・3キロ北側の国道2号沿いまで避難することが望ましいとされている。

研修では教職員が4班に分かれ、同じ校区内の中学校に向かう2コースに分かれて出発。一部区間が崩れる危険があるため、「早い段階で避難」と話した。（山脇茂実）

2016 年 8 月 25 日神戸新聞より

きたことは大きな成果だった。

一方、実際に歩いてみないとわからない課題も多く見つかった。「①どのように判断をするか（何が起こっているのか、自分はどこにいるのか、津波はいつくるのか、どのくらいの規模か、誰といるのか）⇒情報をつかむ」「②子どもたちをどのような形で避難させるか」「③子どもたちへの学習機会が必要」などが挙げられた。この研修会を機に、10 月、実際に全校児童を対象にはじめて水平移動訓練を行うことができた。

(写真)「のぼりを先頭に水平移動訓練をする児童（10 月)」

(写真)「打出ののぼり」

③1.17「追悼集会」、震災慰霊碑めぐり(６年)

追悼集会は、本校在籍中に亡くなった児童、そして阪神淡路大震災で亡くなった方々のことを追悼し、命について考える時間として今後とも大切にしていきたい。特に、打出浜小の震災を知る方にお話を聞く時間は何よりも貴重な体験だ。2016 年度は、本校保護者である A さん（震災当時精道中 1 年生、本校卒業生）に震災当時のお話をお願いした。当時、中学校 1 年生の A さん。同じバスケットボール部の親友を亡くした。はじめ、依頼を固辞された。1 週間後、「私の話が打出浜小の子どもたちに少しでも役立つのでは…」と引き受けてくれた。震災を経験した人々が自分の体験を語ることは、つらい作業である。当日、A さんは今も大切にしているバスケットボールのユニフォームを持ってきてくれた。追悼集会で、A さんは震災の日の様子、大切な友だちを亡くした時の気持ち、そして、その友だちのことを今も大切に思っていることを涙ながらに語ってくれた。22 年たった今も、震災はまだおわっていない。地域には震災で傷ついている多くの人々がいることを私たちは再確認すべきだと思った。

本校の「震災をわすれないとりくみ」でとてもいいなあと思う実践が 6 年生の「震災慰霊碑めぐり」だ。

1 月 17 日、追悼集会終了後、数名のグループごとに市内の震災慰霊碑を巡っていく。「精道小学校の祈りの碑」「阪神高速慰霊の碑」「芦屋市慰霊の碑」「精道保育所」など、全部で７か所を周る。それぞれの慰霊碑の前では花が手向けられ、多くの方が献花する。涙を流して手を合わせる方もいる。子どもたちはそんな 1.17 の空気を肌で感じ取る。はじめ、はしゃぎぎみの子どもたちもその光景や空気を感じ取り、真剣な表情で慰霊碑を見ている。1 月 17 日、被災地をまわる意義はとても大きい。

③ 避難所開設訓練」の計画と実施

阪神・淡路大震災では、学校が地域の避難所となり多くの地域の人々が避難してきた。日本各地で多くの災害が起こる中、「地域の防災拠点としての学校の役割」はとても大きくなっている。若い教職員も増え、阪神・淡路大震災時の避難所運営を経験したメンバーも少なくなってきている。そんな中、本校でも「一度、避難所開設訓練をやってみよう！」と提案した。

（防災研修会・避難所開設訓練の流れ）

①はじめの言葉・講師紹介（校長）

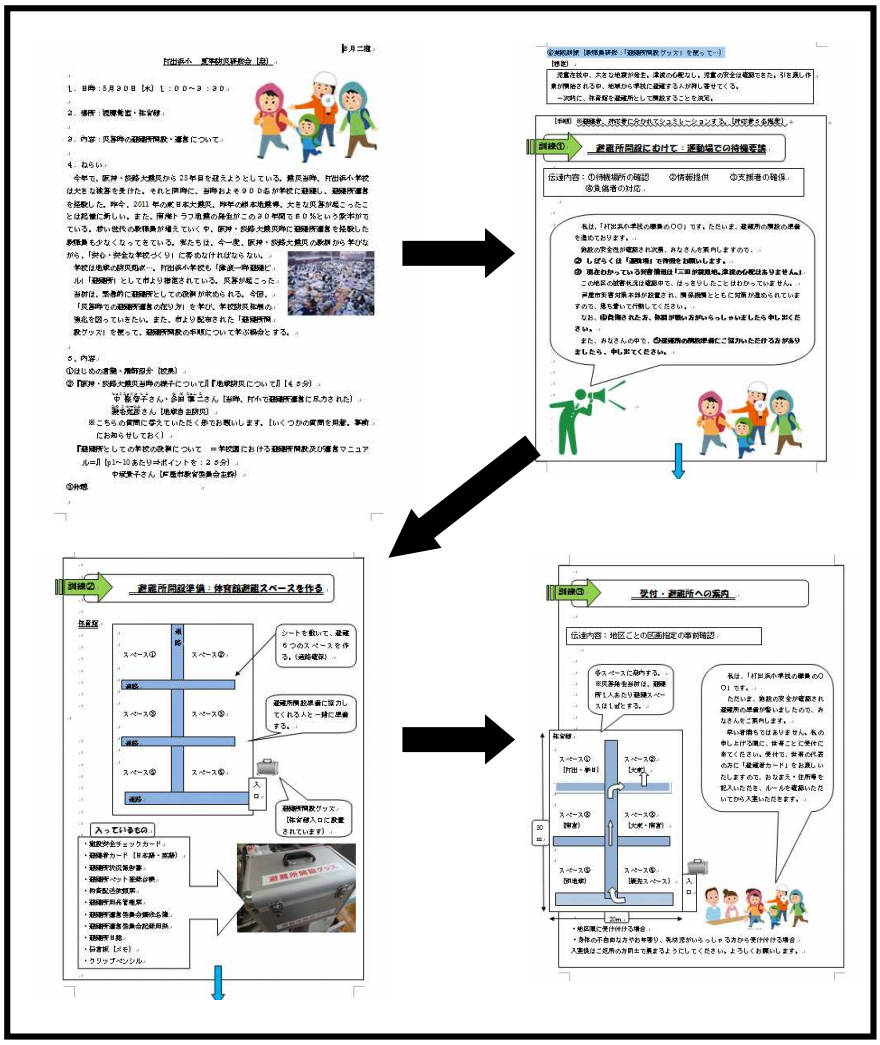
②阪神・淡路大震災当時の様子について』『地域防災について』（45 分）

・当時、打小で避難所運営に尽力された方（地域）に当時の避難所の様子について話を聞く。

・『避難所としての学校の役割について　＝学校園における避難所開設及び運営マニュアル＝』（芦屋市教育委員会防災担当より：25 分）

④　実践訓練（教職員研修：「避難所開設グッズ」（芦屋市教育委員会作成を使って…）

訓練の様子（写真）



講師より（訓練後）
「何でも話せる、助け合える、相談できる」同僚性豊かな職場が結果的に「災害に強い」組織です。

３　課題及び今後の取組の方向

2017 年 1 月 17 日、平山瑠子さん（大阪法科経済大客員研究員）が来校。本校の「震災をわすれない」とりくみを行った 6 年生の子どもたちに次のような言葉を贈ってくれた。

「皆さんは、いつか必ず東日本・原発災害、熊本地震など大きな災害に被災した人と出会います。1.17 の震災をわすれないとりくみを学習した皆さんに救われるいのちがあります…」

今後も、「震災をわすれない」とりくみを学校文化にしていけるよう教育実践を積み重ねていきたい。